

地域情報（県別）

【長野】「医師が病院にいただけじゃ変わらない」一大啓発事業が始まった理由-坂本昌彦・「教えて！ドクター」責任者に聞く◆Vol.1

2020年6月19日（金）配信 m3.com地域版

「教えて！ドクター」。医療者の中にはこの名を聞いたことのある人も多いのではないだろうか。子どもの病気やホームケアなどについて情報発信するプロジェクトであり、スマートフォンアプリのダウンロード数は約14万、ツイッターフォロワー数は3万を超えた。また、2018年にはキッズデザイン賞とグッドデザイン賞を受賞した。責任者を務める佐久医療センター（長野県佐久市）小児科医長の坂本昌彦氏に、この啓発事業が始まった経緯を聞いた。（2020年3月25日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——まずは、「教えて！ドクター」の取り組みについて概要をお聞かせください。

「教えて！ドクター」は、子どもの病気やホームケア、医療機関を受診する目安などについて主に子を持つ親向けに情報を伝えていく取り組みです。メンバーは6人で、私のほかにイラストデザイナー、ウェブデザイナー、アプリ開発者とそのデザイン担当者、障害児・者支援NPO法人代表がいます。情報を発信する媒体としてはアナログとデジタルを組み合わせているのが特徴で、冊子やインターネットサイト、スマートフォンアプリ、SNS（ツイッター、フェイスブック、インスタグラム）を活用、私を含めた佐久市の医師が定期的に市内の保育園を訪問して園児の保護者にお話する出前講座も行っています。

プロジェクトの母体は佐久医師会で、佐久医療センターの小児科が、具体的には私が責任者として同医師会からかじ取りを任されている形ですね。2015年12月に出前講座を始めてほぼ同じ時期に冊子ができ、2016年3月にアプリをリリース、2017年にサイトを開設しました。フェイスブックは以前から私がやっていたので活動開始当初から情報を出していて、その後、ツイッター、インスタグラムと立て続けに運営を始めました。

アプリのダウンロード数は2020年3月現在で約14万、ツイッターとインスタグラムのフォロワー数はそれぞれ約3万3000、約1万です。



坂本昌彦氏

——佐久医師会が母体とのことですが、どんな経緯でプロジェクトが始まったのですか？

もともとは、佐久市から佐久医師会に「子育て支援の事業を始めたいので協力してくれないか」と相談が寄せられたことがきっかけです。佐久市は国から地方創生に関する交付金をもらっていて、その使い道として「子育て支援」をテーマにしたそう。そこで医師会に相談があり、医師会からさらに市内の医療機関の中で最も小児科医が集まる佐久総合病院グループに話がありました。

佐久医師会からは既に「出前講座はどうか」と案が出ていたと聞きます。これは医師会の小児科医会の先生が過去に子育て広場のような所で親向けに子どもの病気の話をしたところ受けが良かったからで、それで「こんなア

アイデアはあるがほかにはどう？」と佐久医療センターの小児科部長が私たちに尋ねたんですね。

私が佐久医療センターに勤め始めたのは前年の2014年で、着任当初から部長に「地域に向けた啓発活動をしたい」と話をしていたので、このときに部長から私に話が向けられました。私がやりたかったのもちょうど同じ出前講座だったので「ぜひ」と手を挙げた次第です。

——なるほど、そんな経緯が。先生はなぜ出前講座をやりたいと前から思っていたのでしょうか。

佐久医療センターに勤める前に自分で出前講座をやっていて、手応えを感じていたからです。私は2011年から2012年の1年間、福島県南会津町にある県立南会津病院に勤めたのですが、そのときにとても印象深い出来事がありました。

2011年の冬、12月ごろのことです。同病院は山間の豪雪地帯にあり、当然のことながらその時期も周囲は辺り一面、白雪に覆われていました。深夜1時過ぎだったと記憶しています。当直だった私の元に、お母さんが慌てた様子で駆け込んできました。生後11カ月くらいのお小さなお子さんを抱えていて、不安そうな表情。熱が出たそうで、確かに数値としても38度5分ほど高かったのですが、意識は正常でぐったりしているわけではなく、水分もとれていました。医師としての私から見れば、慌てて病院に来る状態ではありませんでした。

私が危機感を覚えたのは、そのお母さんが路面の凍結した山道を1時間半かけて車で来たことです。これはかなり危ないですよ。診察は3分ほどで終わるもので、お子さんの状態としても家で寝ていればやがて回復するものでした。その一方、苦勞して病院まで来る間に事故を起こす可能性があるわけです。このアンバランスさに私は衝撃を受け、「これはいけない」と思いました。



子どもの病気やホームケアなどについて解説されている冊子（151ページ）



症状ごとに対応方法が細分化して書かれている

——冊子とアプリ、サイトには症状ごとに「すぐを受診」「診療時間内に受診」「こんな場合は救急車を」といったように細分化して書かれています。説明が丁寧だと思ったのですが、これは先生の実体験が根にあったわけですね。

はい。医療機関を受診する目安を親御さんが知っていれば先ほど話したお母さんのようなケースや医療の世界で問題になっている「不要な救急搬送」も減るのではないかと。

それを現実にしていくために思ったのが、「自分が病院の中にいるだけじゃ何も変わらない」「病院の外に出ないといけない」ということ。親御さんの中でも医療リテラシーの高い人はいて、そういった人は自らインターネットを使って情報を得ようとします。しかしながらそんな考えがあまりなかったり、あるいは普段の生活や仕事で手一杯だったりする方に対してはこちらから出向いてお話をした方がいいだろうと考えました。

そこですぐに院長に許可をもらい、町役場や保育園に連絡をして翌年の1月から訪問を始めました。外来患者さんが少ない時間帯や外来終了後、土曜日に手作りのパンフレットを片手に保育園に出向き、40分から50分ほど子供の病気への対応などを話すようにしました。

私が狙ったのは保護者が必ず集まる参観日やクリスマス会などの行事があるタイミングです。当初、町役場の方から「公民館の一室を借りるのはどうか」と提案がありましたが、そのような場に来る人は比較的意識の高い方々でしょう。私が話す内容を既に知っている可能性も低くないと思われます。「なんだかよく分からないけど園から『集まって』と言われたから来た」といった方を含めてアプローチした方が効果的だと思ったんですね。

結果的に、私が同病院の勤務を終える3月までに13カ所に足を運びました。

◆坂本 昌彦（さかもと・まさひこ）氏

2004年名古屋大学医学部卒。厚生連安城更生病院や県立南会津病院、タイやネパールでの勤務を経た後、2014年に佐久総合病院グループの佐久医療センター小児科医長に着任。2015年から子どもの病気やホームケアについて伝える佐久医師会のプロジェクト「教えて！ドクター」の責任者として活動する。専門は小児救急や国際保健。日本小児科学会小児科専門医。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

